
公開講座

「認知症の人と共に生きること」

The 29th Tohoku Occupational Therapy Congress in Yamagata

アルツハイマー型認知症をもつ人を理解し支援する

林 博史

山形大学医学部精神医学講座 准教授



認知症 500 万人時代を迎え、認知症は私たちにとって身近な存在になっている。認知症をおこす原因は様々で、原因によってその症状や経過が異なるため、正しい診断が不可欠である。物忘れなど気になる症状があるときは、かかりつけ医に相談の上、一度は専門医を受診し、うつ病や慢性硬膜下血種など認知症と似た症状を示す治療可能な病気を見逃さないようにすることが大切である。認知症の原因で最も多いのがアルツハイマー病で脳内に異常な蛋白が蓄積することで発症する。アルツハイマー型認知症の症状は記憶障害や遂行機能障害などの中核症状と妄想、うつ、興奮などの行動・心理症状（behavioral and psychological symptoms of dementia: BPSD）に分けられる。現時点で、アルツハイマー型認知症の根本的治療薬はないが、抗認知症薬やデイサービスなどの介護保険サービスの利用が、認知機能および身体機能を維持する上で有用である。また、BPSD はすべての人に現れるわけではないが、患者やその家族の生活の質に大きく影響する。環境調整や対応を工夫することで改善可能な症状も多く、認知症をもつ人を正しく理解し対応することが大切であり、イギリスの心理学者が提唱した Kitwood の公式が役立つ。認知症の症状は脳の機能低下によってもたらされる神経症状を基盤にして、元来の性格、生活史、身体の状態、対人関係における心理など様々な要因が関与し形成されると考えられている。認知症をもつ人の心理や行動を理解する上でこれら多角的視点が欠かせず、その人の立場に立って考え、ケアを行うパーソン・センタード・ケアに活かされている。アルツハイマー型認知症の危険因子として高血圧や糖尿病などの生活習慣病が挙げられる。また、不眠もアルツハイマー型認知症と大きく関わっていることが知られるようになった。バランスのとれた食事や適度な運動、十分な睡眠がアルツハイマー型認知症の予防につながり、認知症になった後も重要である。

略歴 ● 林 博史（はやし ひろふみ）

福島県生まれ。

平成 2 年 3 月 山形大学医学部医学科卒業

米沢市立病院、秋野病院などの勤務を経て

平成 13 年 4 月 山形大学医学部精神科助手

平成 14 年 4 月 同講師

平成 26 年 10 月 同准教授

所属学会

日本精神神経学会専門医、日本老年精神医学会専門医・評議員

東北精神神経学会評議員

現在、山形大学医学部精神科および篠田総合病院認知症疾患医療センターで物忘れ外来を担当